《特集》

技術系人材不足の一助に 中小企業と外国人材の架け橋として

～千葉商工会議所の取組み～

中小企業の人材不足が叫ばれている中、建設業や製造業など日本のモノづくりを支える企業では、外国人労働者の存在は必要不可欠となっています。課題解決の一助となるよう、千葉商工会議所では、技術者人材を育成しているモンゴル高等専門学校と、中小企業とを結びつけるマッチング事業を実施。実際にインターンシップ生として働く3人のモンゴル人学生と、受け入れ先の企業にお話を伺いました。

製造業とモンゴル高専生のマッチング事業を展開

千葉商工会議所の役員が2017年にモンゴルを訪問し、モンゴル商工会議所と意見交換をしたことがきっかけとなり、2018年にモンゴル商工会議所視察団が千葉市を訪れました。市内の企業視察や展示会、商談などの調整を当所が行い、それ以降も、「モンゴル工業技術大学付属高専」との意見交換会の実施や、校長の来所など、モンゴルとの交流を深めていきました。

また、当時は建設業や製造業をはじめとする中小企業で、技術系人材の不足感がいっそう強まる時期とも重なっていました。そこで、その解消を目指し、千葉市内の事業者と日本での就職を希望する専門的な技術を習得したモンゴル高専生との橋渡しを当所が果たすべく、このマッチング事業に着手。2020年には、高等専門学校機構のキャリアセンターからの案内があり、当所会員企業へ紹介したところ、モンゴル高専生1名が入社しました。

▲平成29年度のモンゴル商工会議所視察団の来葉

コロナ禍に中断していたビジネスマッチング事業は、昨年再開され、製造業に加え、土木、建設、電気業などへも対象範囲が広がりました。モンゴル高専生に関心がある市内6社がオンライン会社説明会を行い、面談などを経て、高専生3人のインターンシップが2社に決定。今年1月に来日し、それぞれの企業で研修を行いました。

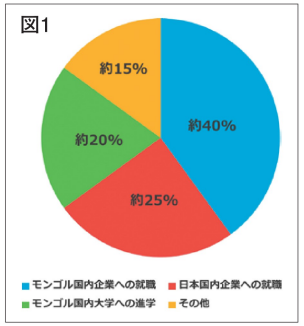
日本高専の教育システムを導入 技術者を育て、日本語も学ぶ

国内の高等専門学校生は、早い段階から専門的な教育や技術を身につけて卒業するため、「技術者」として、モノづくり企業を支えています。モンゴルでも国をあげて「技術者」を育てようという意識が高まり、「若者の海外留学を通した専門技術の習得」を目指すようになりました。日本とモンゴルは、1972年に外交関係を樹立。以来、文化や教育の分野で交流を重ねていき、モンゴル学生の留学先として日本は高い人気を誇っています。

2014年には「モンゴル科学技術大学付属高専」「モンゴル工業技術大学付属高専」「新モンゴル高専」の3校を開校。着目すべき点は、日本の高専の教育システムが導入されているということ。日本の高専と同様、技術者の育成に注力して教育を行っており、機械工学、電気電子工学、建設工学のそれぞれの分野で実践的に学べるカリキュラムが作られました。モンゴル高専では5年間修学し、技術以外にも1年生から5年生まで日本語を学びます。そのため、日本でのインターンシップや就労に関しては、言葉の壁は決して高くはありません。

2023年には、国内外で技術者の需要の高まりを受け、モンゴル国内にさらに3校の高専が開校。日本企業への就職人気も高まりを見せており、高専卒業生の進路は、日本企業への就職が25%となっています（図1）。潜在的なニーズとして、日本企業への就職希望者は、全体の50%を超えていると言われています。

図1



モンゴル人の技術力に期待 次世代を担う人材に

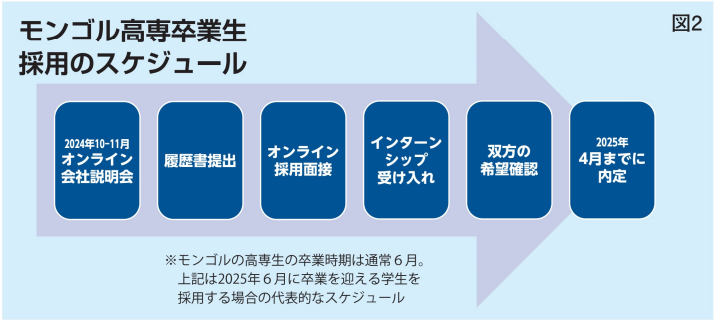
技術を生かす場所として日本を選択するモンゴル高専の生徒は多く、日本での就労環境の良さなどから、長期就労となるモンゴル人も少なくありません。外国人が日本企業への正規雇用を希望する場合、「技術・人文知識・国際業務」の在留資格を取得することを目指します。特別な技術や知識が不要な「技能実習」とは違い、大学や高専などの高等教育機関を卒業したことが条件で、技術・知識を必要とする職につき、日本人と同等以上の報酬、昇進、昇格、福利厚生などを受けることができます。また、付与されている在留期間の範囲内で期限なく働くことも可能。人材不足という課題を抱える日本の製造業において、高い技術と知識を持つモンゴル高専の学生たちは、今後活躍が期待されています。

当所では、優秀な人材の確保に向け、採用へ意欲的な企業に、インターンシップの受け入れ支援を実施していく予定です。マッチング事業に広がりが見えれば、支援団体と連携し、インターンシップにかかる渡航費などの諸経費の一部を負担することも検討。実際に人手不足解消（人材採用）につながるような仕組みづくりを今後も進めてまいります。

▲モンゴル高専の外観

▲モンゴル高専授業風景

図2



お問い合わせ先
千葉商工会議所
経営支援部・経営支援課
千葉市中央区中央2-5-1
TEL：043－227－4103

《特集》

モンゴル人インターンシップ事例 1

モデン工業株式会社

モデン工業の業務概要

1960年に茂原市で創業。オフィスビル、ホテル、病院などあらゆる施設の電気設備施工や保守管理、太陽光発電システム工事などを請け負う。社員の仕事に対する前向きさややりがいを重視し、不自由のない環境作りに取り組んでいる。

【住　所】千葉市中央区松波3-11-19
【TEL】043-255-1911
代表取締役　関　泰之

●関代表取締役に聞く

モンゴル人インターンシップの取り組みについて

Q　モンゴル人インターンシップを受け入れることになった経緯を教えてください。

当社は、2024年からミャンマー出身の技術者2名を採用しています。それがきっかけで商工会議所から、この取り組みを紹介いただきました。3人の学生とWeb面談をしましたが、バスバヤルさんだけが日本語で対話していたのと、彼だけスーツをきちんと着用していたのが採用のポイントでした。

Q　受け入れまでに準備したことは。

日本人大学生のインターンシップを実施しているので、そのプログラムを基本に、バスバヤルさんに合わせた研修内容を作成しました。保険加入や滞在ビザの申請など、事務手続きの準備は時間がかかりましたが、負担が大きいとは感じませんでした。

▲関社長

Q　実習はどのような内容でしたか。

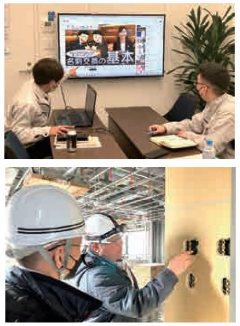
会社の歴史や電気工事業界についてのレクチャー、日本での社会人のマナーについて、現場実習、CAD研修など多岐にわたりました。

Q　社員の方の反応はいかがでしたか。

「とっても真面目でしっかりと考えを持っている」「わからないことも素直に質問してくれた」「言葉の壁もあまり感じなかった」など、社員からは好意的な印象でした。専門用語や難しい言葉については、翻訳ソフトなどを活用して対応しました。

Q　海外人材の受け入れを検討している企業へアドバイスをお願いします。

モノづくりの現場は、働き手の減少が年々加速しており、時間は待ってくれません。今できる取り組みのひとつが外国人インターンを受け入れることなら、まずは挑戦してみて、それから人材採用の方向性を改めて考えてみてもいいと思います。



●モンゴル人インターン生に聞く

日本での研修について

Q　モンゴル高専で学んでいることは。

電気と電子工学について学んでいます。

Q　家族の反応はいかがでしたか。

アメリカなど他の国に行くことも考えましたが、家族が日本は安全な国だから安心と言って送り出してくれました。

Q　日本についての印象は。

日本は本当にきれいな国だなと思いました。また、従兄弟が日本の大学に通っているので、週末に秋葉原や新宿など東京の街を案内してもらいましたが、とにかくにぎやかだなと感じました。

Q　モンゴルと日本の違いを感じることはありますか。

大きな違いは気候です。モンゴルの冬はマイナス20度ですが、日本は冬の気温でも10度あるので過ごしやすいです。

Q　将来の目標を教えてください。

日本の電気関係の会社で働き、お金を貯めてから、モンゴルに戻り、起業するのが目標です。

▲**プロフィール**　スフボルド・バスバヤルさん（19）
現在モンゴル高専5年生。電気関係の技術や知識とともに、5年間日本語を学ぶ。今年6月に卒業予定。インターン生として10日間日本に滞在。日本食で好きになったのは「かつ丼」。